



アオキ裕キさん(左から3人目)と、ソケリツサ!の中心メンバーのみなさん。稽古の様子取材させていただいた。

ソケリツサ!という自己表現

アオキ裕キ(新人Hソケリツサ!)

心のしこりを吐き出すかのように
強く地面を踏みしめる人、

迷いを抱えながら踊る人、
何かを悟ったかのように

静かに動く人……

彼らに与えられているのは

「ことば」のみ。

「ことば」を頼りに、

それぞれが自由に

振りをつくっていく——。

稽古をしているのは新人Hソケリツサ!(以下、ソケリツサ!)のメンバー。ダンスを主とした肉体表現を行うパフォーミングスグループだ。稽古を拝見したあと、グループを立ち上げたアオキ裕キさんにお話をうかがった。

誕生のきっかけは、

アメリカ同時多発テロ事件!?

「自分が表現できてるか自信がない

んです。でもこの場が好きで来ちゃうんですけど」

「他のメンバーみたいに、もっと大きく動きたいんだよね」

「取材カメラが回ってないと、よくしゃべるねえ」

メンバーたちの笑いが起こる。

ソケリツサ!は、アオキさんと

路上生活をしている(していた)人たちで構成されている。まず、立ち上げまでの経緯についてうかがった。

アオキさんは高校卒業後に上京し、ダンサー・振付家として早いうちから仕事と収入に恵まれた。

ニューヨークへ渡航した2001年、アメリカ同時多発テロ事件が起こる。もともと便利で快適な暮らしに疑問があり、身体感覚がマヒしているのではないかと、という漠然とした想いが、テロによって強くなり、自分の生き方や踊りについて見直したいと思った。

(左ページ) 稽古風景。ひとりずつ前に出て、課題として与えられたことばを全身で表現していく。少し離れたところからアオキさんがじっと見守る。



東京近郊を中心に、各地で公演を重ねてきている。
(上) 新作公演『日々荒野』 豊島区・池袋東中央公園にて
(左) 東京近郊路上ダンスツアー 台東区・玉姫公園にて
※撮影:河原剛(いずれも)

しかし、帰国しても何をしたらいいかわからなかった。ある日、路上でお尻を出して寝ているおじさんがいて、彼が表現したときにどういう景色が生まれるのか知りたくて、一緒に踊ってみたいと思った。それが2005年のこと。

「快活でもなく、人とすぐ仲良くなれるタイプでもない」というアオキさんは、路上にいる人への挨拶から始めた。少しずつうちとけて、ダンスの話を持ちかけた瞬間、シャットアウトされる。その繰り返しだった。しかし、アオキさんはあきらめなかった。路上生活者が売る雑誌『ビッグイシュー』を知り、代表者に話して、販売者が集まるサロンを紹介してもらった。参加者に踊りを観てほしいと伝え、観に来た6人が最初のメンバーになった。

「ことばの“制約”と “自由”な踊り

初めての公演は2007年。当時は、アオキさんが振り付けをした。しかし、足が悪かったり、骨格がいびつで踊りづらい人がいたり、振りを教えても数十秒後に忘れてしまう人もいた。なにより、彼らの日常の姿が見えない。そこで考えたのが、

ことばを提供すること。「月の上を歩く」「鎖で体を縛られる」「太陽を飲む」などのことばを伝え、本人に踊りを考えてもらう。すると、彼らの生きてきた記憶や見てきた景色が投影された動きになった。

3回目までは自主公演だったので、メンバーにお金を渡すことができなかった。また、舞台を終えると日常に埋没してしまい、稽古に来なくなってしまうことも。最初の頃はメンバーの入れ替わりが激しかった。成功しない、と周囲からはさんざん言われた。それでも、10年以上続いた原動力は、生きてきた軌跡を表現する踊りがアオキさんの心をゆすぶり、それは観客の心もとらえるはずであり、世界中の人に見せたいという想いだった。

ソケリッサーは居場所であったり、痩せる目的であったり、注目されるためであったりと、メンバーが参加する理由はそれぞれ。アオキさんは、モチベーションを統一しようとは考えていない。唯一のルールは、人に迷惑をかけないこと。「遅刻や欠席の際は連絡するよう言ったら、おじさんたちの動きが委縮してしまった。日常でいろいろなしがらみがあるのだから、踊りで縛るのはやめよう」と。ことばの制約は自由に反するようで